



魔界水滸伝1
栗本 薫
角川書店 (新書)
(11/1刊・¥600)

クトゥールの神々対日本の妖怪たちの、死闘を(現代を舞台に)描くシリーズらしい。クトゥール神話は、H・P・ラヴクラフトの創り上げた、いわば裏側の、暗闇の神話世界。御存知の方も多いはずだ。宇宙的恐怖とも称され、主に一九二〇年と三〇年代に書かれた。ラヴクラフトの生前は、あまり一般評価を受けなかったが、熱烈な信奉者も多く、何人かの作家が、この神話を題材に作品を発表している。コリン・ウィルスン辺りが有名だろう。大半は原典のムードに従った、恐怖小説の体裁で書かれたものだ。

ところが、最近になって日本でも書かれるようになったクトゥールものは、いささか趣が違っている。本書なども、クフガイ風ルポ・ライターが出てきたりして、冒険アクション仕立てになっているようだ。第一巻目では、古代から眠りにについていた、日本の妖怪たちが、クトゥールの神々の侵入に気付き、目覚めはじめるまでの冒頭部が描かれている。登場人物も揃って、いよいよ、妖怪大戦争がスタートするわけだ。しかし、適度に残酷、適度に暗黒のこの感じは、本書のイラストを描いている永井豪に、不思議とびつたり合う。(後)